In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	大化前代の難波 ： 難波宮下層遺跡を中心に
Author	積山, 洋
Citation	市大日本史. 18 巻, p.12-33.
Issue Date	2015-05
ISSN	1348-4508
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

大化前代の難波 ― 難波宮下層遺跡を中心に ―

積山　洋

はじめに ― 難波の地理的条件 ―

古代王権の都は、奈良時代までは一貫して内陸の大和、時には近江に置かれ、その後は山背に遷ったが、海辺の難波は孝徳朝の都となった。本来、畿内の表玄関すなわち王権の外港の地であった難波に都を置いたのはいったいなぜであろうか。それを考える前提として、本稿では難波宮下層遺跡を中心に七世紀中ごろまでの遺跡をとりあげ、遷都の前史について考えてみたい。

難波宮下層遺跡とは、その名のとおり難波宮跡で発見され、かつ難波宮に先行する遺構群の総称であるが、一九五四年に発掘調査が始まって以来、すでに二〇〇棟を超える多数の建物群が発見されており、その分布も宮域を越えて広がっていることから、相当大規模かつ重要な遺跡であったことが判明している。とはいえ、この遺跡に対する研究はいまだ充分ではないのが現状である。それゆえに今回取り上げるわけであるが、手始めに、まずは難波の地理的条件をみておこう。

古代難波の中央を、南から北へ半島状に貫く丘陵が上町台地である。その北端の平地は標高わずか二二～二三m程度に過ぎないが、大阪平野の最高所にあたり、視界は三六〇度に開けている。この地は、東は大阪平野から生駒・信貴の連山、西は大阪湾から淡路島などが一望できるだけでなく、すぐ北側では近畿の二大河川である大和川と淀川が合流し、東および南北に開かれた陸路の起点となるなど、水陸交通の結節点というすぐれた位置を占めている。そのため、政治的にも経済的にも、いわば畿内の表玄関という性格を帯びることとなった。

このような立地を、後世の史料から見直してみよう。豊臣秀吉が大坂城を築いた際、彼の命により大村由己が著した『柴田退治記』では大坂の立地を以下のように評価している。

「秀吉は摂津の国大坂において城郭を定む。かの地は五畿内の中央にして、東は大和、西は摂津、南は和泉、北は山城、四方広大にして中に巍然たる山岳なり。麓を廻る大河は淀川の末、大和川流れ合ひて、其の水即ち海に入る。大船小船、日々岸に着く事、数千艘と云ふ

事を知らず。平安城へは十余里、南方は平陸にして天王寺・住吉・堺津へ三里余り、皆、町・店屋・辻小路を立て続け、大坂の山下となるなり。五畿内を以て外構へとなし、かの地の城主を以て誓固となすものなり。」

秀吉に先立ち、大坂本願寺と一〇年にわたる抗争を続けた織田信長も大坂に対して同様の視線を注いでいた。信長に仕えた太田午一の『信長公記』（巻一三）がそれを伝える。

「抑も大坂は凡そ日本一の境地なり。…略…西は滄海漫々として、日本の地は申すに及ばず、唐土・高麗・南蛮の舟、海上に出入り、五畿七道集まり、売買利潤富貴の湊なり。」

信長は、大坂が東アジアからヨーロッパにおよぶ対外関係の要地であるとし、のちに秀吉が実行した「唐入り」（朝鮮侵略）を構想していた。降って明治維新の際も大坂遷都論が提起されたように、難波のすぐれた立地は、しばしば為政者の注目するところであった。[1]

古代においても、難波津は王権の外港であり、畿内の表玄関として、瀬戸内ルートから朝鮮半島・中国大陸という東アジア世界につながる枢要の地であった。

私はもうひとつ付け加えたい。それは淡路島の存在である。『万葉集』に「難波潟潮干に立ちて見わたせば淡路の島に鶴渡る見ゆ」（巻七、一一六〇）とあるように、難波人は朝な夕な、淡路を大阪湾の正面に見て暮らしたが、この島の存在は、外敵から難波を守る天然の防壁でもあった。海路から難波に至るには紀淡海峡と明石海峡を通過するほかなく、対外関係の差し迫った幕末期には外国艦船砲撃のため、前者に和歌山藩の友ヶ島台場、後者に明石藩の舞子浜・徳島藩の松帆両台場が設けられたように、この二海峡は大阪湾―畿内防衛の最前線であった。特に瀬戸内に通じる明石海峡は潮流の急なことで知られる難所であった。難波は海辺の都市とはいえ、五畿内のみならず、淡路をも外構えとする天然の要地だったのである。

一　大化前代難波の研究史抄

難波宮下層遺跡は、一九六〇～七〇年代の難波宮中心部の調査に伴い、次第にその姿を明らかにしてきた。特に内裏地区では、桁行一〇間の大型建物の一部や門ふうの建物と塀の一部や溝群が発見され、また前期西八角殿付近でも細長い官衙ふうの建物群が検出され、注目を集めることになった。[2] 遺構は北で二〇度前後東に振れており、溝の出土遺物には瓦と七世紀前半の須恵器などがある。一九六八年のNW三〇次調査では四群に分類される一三棟の建物群が発見され、倉庫とみられる建物が多いことから、『日本書紀』安閑元年（五三四）一〇月条の「難波屯倉」、あるいは欽明二二年（五六一）以後登場する「難波大郡」「小郡」などとの関連が取り沙汰されることもあった。[3]

文献史学からの古代難波研究は古くからあるが、難波宮の発掘調査以後の主な研究を取り上げる。一九五六年、調査を開始したばかりの山根徳太郎は、応神の「大隅宮」と住吉神のもとの祭の庭が上町台地北端付近に存在したため難波が王権の要地となり、その後七世紀に

なって住吉神は住吉の地に祭られたと述べている。[4] のちに、五世紀以前からの住吉津が古く難波津は六世紀以後で新しいとする見解が通説的になるのとは正反対の見解であったが、結果的には山根の見通しの通りであった（後述）。

一九七〇年、岡田精司は難波で行われていた宮廷祭祀である八十嶋祭を、大阪湾岸勢力（河内大王家）の首長権継承儀礼が大王即位儀礼に発展したものとした。[5]

一九七六年、直木孝次郎は難波屯倉をとりあげ、[6] 先進的な鉄製農具を有した鑊丁（くわよぼろ）が農耕に従事したのみならず、新羅の王子・天日槍の末裔との伝承をもつ三宅連氏（『姓氏録』では摂津国諸蕃）が当初から経営に関与し、海外交通・運輸などの機能を有していたとした。難波屯倉が、農業生産を基本とする王権の直轄地というミヤケの通説的理解とは少しく異なる屯倉であることが明確にされた。また翌一九七七年には難波小郡宮と長柄豊碕宮に関する論考で[7] 小郡と大郡について述べ、前者は内政機関、後者は外交機関とする見解を提起し、以後の定説となった。

一九八〇年、鎌田元一は大化五年全面施行の評制以前に屯倉を中核とする地方支配システムとして「郡（コホリ）」があったことを、皇極朝の「難波郡」を例としてあげた。[8] 画期的論文であったが、難波大郡・小郡は難波宮以後に生じた区別であり、孝徳朝以前のそれは『日本書紀』の追記であるとしたものの、大郡と小郡がいかなる区別により分化したのかという点に課題を残した。

一九八二年、吉田昌は初めてまとまった古代難波の概説書を刊行し、在地の有力首長がいなかったこの地に古墳時代の王権が難波津を設[9]けて直接支配し、渡来人の集住と都市的性格を獲得したことが難波遷都の歴史的前提であるとした。示唆に富む考察であった。

歴史地理学からは難波津の位置をめぐる議論があった。一九七四年、千田稔は上町台地西方の御堂筋付近に古代の海岸線を復原し、難波宮の南西、現在の大阪市中央区三津寺町付近を難波津とする見解を提起した[10]が、一九八五年には日下雅義が難波宮の北西、大川沿いの中央区高麗橋付近を難波津とみる説をとなえ、[11] 以後、優勢となった。

一方で、難波宮下層遺跡の建物の発見例は増加していた。一九八四年、木原克司は上町台地北端の地形復原を行い、初めて難波宮下層遺跡の建物群を集成（柵を含む約九〇棟）したが、台地平坦部の建物は棟方位が微地形に規制されないが、斜面地の建物は等高線に平行または直交するとの知見を述べるにとどまった。[12] 当時としてはやむをえなかった面もある。

一九八六年、中尾芳治は著書『難波京』[13] において、下層遺跡の存続年代を六世紀末～七世紀中葉とし、建物群について、東西八二〇m・南北八六〇mに及んで分布し、中に桁行六～一〇間という大型建物を含むことから、単なる集落遺跡ではなく官衙的性格の強いものとした。慎重ながら難波宮下層遺跡に対する初めての歴史的評価であった。

一九八八年、黒田慶一は難波宮中心部で発見されている下層遺跡の大型建物に検討を加え、塀で囲まれた建物群を大胆に復原、これを難

波大郡とする見解を提起した。[14] 当時は冒険的とも受け取られた見解であったが、下層遺跡に対する中尾の見解を継承し、そこに具体的な官衙を見出そうという論稿であった。

一九八七年から三年間に及んだ現大阪歴史博物館敷地での発掘調査は、前期難波宮の内裏西方の倉庫群（大蔵）の発見にとどまらず、計一六棟からなる古墳時代中期の大型倉庫群（法円坂倉庫群）の発見という大きな成果をあげ、六世紀以後とされてきた難波宮下層遺跡が五世紀後半には始まることを明らかにした。[15] またこの調査の結果、南秀雄によって倉庫群の廃絶以後の下層遺跡の建物群の変遷や難波の土器編年の基礎がとらえられた点でも画期的であった。[16]

ほぼ同時期に難波の土器研究を進めていた京嶋覚も、下層遺跡の土器編年を示すとともに、外面をハケではなくナデで仕上げる土師器炊飯具をこの地特有の「難波型」として認定し、六世紀以来、独自の土師器生産が行われたことを明らかにした。[17]

一九九一年、古墳時代の国家形成を追求してきた都出比呂志は、法円坂倉庫群を「初期国家」の租税収納施設と位置づけ、その収容可能量を穀稲三万七〇〇〇石とし、税率を三～一〇％とみると四万九〇〇〇～一六万町歩の水田から賄われたと推計した。[18] この倉庫群を経済体としてとらえる見解の代表例である。

同年の『クラと古代王権』の刊行は、法円坂倉庫群と前期難波宮の倉庫群の発見を直接の契機としたもので、遺跡の保存運動に資するとともに、考古・古代史・建築史などの研究者九名によってその意義が多面的に検討された。[19]

一九九二年、古代のミヤケを王権の政治的・軍事的拠点と考える舘野和己は法円坂倉庫群を和歌山市の鳴滝倉庫群とともに検討し、いずれもミヤケ制成立以前の大型倉庫群とし、対外交渉・経略のための備蓄・補給基地であるととらえて自説のA型屯倉（田地を伴わない屯倉であり、継体朝の糟屋屯倉が初現）の先駆であるとしている。[20]

一九九四年、私は上町台地の各遺跡の消長をまとめ、[21] 法円坂倉庫群の建設は『書紀』に登場する難波堀江の開削による難波津の成立を示すものであり、難津波の起源は通説の六世紀より古く五世紀に遡ることを提起した。またこの倉庫群の建設を契機として難波と住吉の両地域で多くの集落遺跡が出現（または復活）する画期を迎えること、この画期を以て王権の要地としての難波地域が成立したのであり、通説と逆に住吉津は新しいとした。

同年、京嶋は難波型土師器にみる地域性を、大化前代の公的施設の管理にあたった渡来系を含む集団の継続的な居住の所産とした。[22]

同年、栄原永遠男は法円坂倉庫群を難波倉庫群と呼び、紀伊の鳴滝倉庫群と対比的に考察し、それは高句麗の南下に伴う四七〇年代の国際関係の緊張の結果、建設されたものとした。[23] 今日ではこの倉庫群の建設年代がもっと溯ると考えられる（後述）ので、再検討が必要であるが、王権のクラを国際関係史のなかで捉えた意義は大きい。

一九九〇年代は難波宮の北方で大阪府庁の建替えに伴う調査が継続して実施され、西に開く大きな開析谷が発見されたが、そこで六世紀

後半以後に鉄器生産が行われたことが判明した。先述の土師器生産に次いで下層遺跡における重要な生産活動が明らかにされた。また、この谷を越えた北側の台地上でも下層遺跡の建物群が検出され、その柱穴から鉄滓等が出土することにより、鉄器生産との関わりが推測されることとなった。[24]

二〇〇〇年、古代難波の土器編年は佐藤隆によってほぼ完成の域に達し、前期難波宮の造営は難波Ⅲ中段階、それ以前を下層遺跡の土器とした。[25]

同年、前期難波宮東方官衙の一九八〇年代の調査地で出土した遺物の中からTK二〇八型式ごろの土器に伴うガラス玉の鋳型が発見され、[26]法円坂倉庫群に併行する時期の手工業生産の一端が明らかになった。

また同年、難波宮の北西、大川（淀川本流）北岸の低地にあたる天神橋遺跡で古墳時代の多量の土器や中世の遺構・遺物が出土し、[27]日下説の難波津の位置に近いことから、天神橋遺跡とその対岸が難波津、さらに中世渡辺津の中心地と目されるようになった。

二〇〇四年にはふたたび大川北岸の天満本願寺遺跡で古墳時代中期の竪穴建物が発見され、[28]古墳時代の遺跡が予想以上に広範に広がっていることが知られるにいたった。

二〇〇六年、小笠原好彦は難波館と南山城で高句麗使を饗応した相楽館をとりあげて考察し、[29]難波館が塀に囲まれた空間に門―前庭（中庭）―庁という構造であったこと、難波宮およびその北西に想定される難波津にかけて点々と飛鳥寺様式や四天王寺と同范の軒瓦が出土しているのは、この二寺の造営が一定の進展をみた段階で百済館・高句麗館・新羅館・中国の館が分散して置かれたとみられること、その瓦は蘇我馬子と厩戸皇子が供給したことなどを述べた。

二〇〇八年には宮域東南部（朝堂院の東方）の調査で、[30]東南へ開く埋没谷が発見され、六世紀後半以後、新羅土器やガラス玉鋳型、加工された鹿角片、鉄滓などの出土により、周辺で各種の手工業生産が行われていたことも判明した。

二〇一〇年、難波出土の外来系土器を追求してきた寺井誠は、六世紀前半を中心に伽耶土器、六世紀後半から七世紀中ごろまで新羅土器、六世紀末から七世紀中ごろまで百済土器が難波に搬入されたことを明らかにした。六～七世紀の出土量が他地域に比べて突出して多いことから、対外交流の窓口としての難波の姿を具体的に明らかにした。[31]

同年、前期難波宮の宮城南門の南側斜面地で初期須恵器の窯跡が二基発見され、ほぼTK七三型式を前後する時期のものであることが知られた（NW一〇―一次）。[32]この上町谷窯は法円坂倉庫群よりやや古いとされ、難波宮下層遺跡の起源に位置づけられることとなった。

二〇一二年、重見泰は六～八世紀の新羅土器をとりあげ、[33]六世紀末～七世紀前葉に難波と飛鳥に分布が集中することを指摘した。難波出土の新羅土器は、「任那調」をめぐる対新羅関係の悪化を背景とし、『日本書紀』に残らない難波での外交交渉での献物（賄賂等）や新羅征討軍の戦利品などであり、外交権が大王の許に一元化されていないため、それらは主に蘇我氏に連なる諸豪族が得たものとした。

以上の研究は、まだ古墳時代の法円坂倉庫群や七世紀の「大郡宮」論、あるいは土器論、手工業生産などの個別研究が主流であり、難波宮下層遺跡を体系的にとらえていくものとはなりえていなかった。近年はこうした研究状況に新たな視点がもたらされつつある。

二〇一三年、南はあらためて難波宮下層遺跡をとりあげ、須恵器の初現が遡るという近年の動向を踏まえつつ、法円坂倉庫群の年代を上町谷窯と近い初期須恵器のころまで引き上げるとともに、全国の倉庫群例を検討して序列化し、その頂点に法円坂を位置づけた。またその後の建物群にもクラが多いことから、難波宮北西部の下層遺跡の建物群を難波屯倉として把握した。[34]

二〇一四年は難波宮の発掘調査六〇周年の年であり、論集等の刊行が相次いだ。科研報告書『大阪上町台地の総合的研究―東アジアにおける都市の誕生・成長・再生の一類型―』、中尾芳治・栄原永遠男編『難波宮と都城制』（吉川弘文館）、積山洋『東アジアに開かれた古代王宮　難波宮』（新泉社）などである。難波宮下層遺跡や大化前代の難波をとりあげた論考も多いが、ここでは省略し、以下の行論でそれぞれに触れることとしたい。

以上、簡単に研究史を振り返ってみた。難波宮下層遺跡に難波屯倉をあてることに基本的に賛成するが、『日本書紀』が安閑元年に置いたとするため、それより古い上町谷窯や法円坂倉庫群は区別されることになる。その結果、主として五世紀の遺跡群をどうとらえるのかという課題が残されていることがわかる。また鎌田元一の「難波郡」論に対しても、どう受け止めるのか、考えていかねばならないだろう。

二　難波宮下層遺跡の始まり

（1）上町谷窯と法円坂倉庫群

『日本書紀』には応神朝の大隅宮、仁徳朝の高津宮、欽明朝の祝津宮など難波に置かれた宮室が登場する。難波津や難波堀江などが登場するのも応神紀二二年四月条の「大津」を初現とし、五世紀ごろとみられている仁徳紀以後、史料が増える。だが、いまのところ実態はまったくわかっていない。

すでに述べたように、難波宮下層遺跡の始まりは上町谷窯と法円坂倉庫群である。

上町谷窯[35]は、前期難波宮の南門の位置から南向きに降る急斜面で、難波宮の整地層の下から、二基が並んで発見された。出土した須恵器は初期須恵器であり、ＴＫ七三型式のころと考えられている。遅くとも五世紀前半の窯跡であるが、遺物は少なく、調査地の周囲には過去の調査地が点在しているが、灰原などの形跡はみられないようである。胎土分析の結果、近隣の上町台地北部の遺跡で出土する初期須恵器に上町谷産のものが認められ、製品の供給範囲は限定的だったらしい。とはいえ、その四〇〇ｍ南の清水谷でもＴＫ七三型式、ＴＫ二一六型式の初期須恵器が出土し、焼け歪みの著しいものがあるので、やはり窯があったのではないかとされる。[36]その後、初期須恵器の最終段階であるＯＮ四六段階には難波宮の中心部の下層で須恵器窯の痕跡が

知られている。後続する窯はみつかっていないが、難波宮朝堂院の東側でＴＫ二三型式のハソウに焼け歪みの著しいものがあり、須恵器生産が継続していたとの指摘がある。[37]

法円坂倉庫群[38]は、東西二群、一六棟の掘立柱建物が整然と並んで発見された。いずれも桁行五間（約一〇ｍ）・梁行四間（約九ｍ）で総柱の高床建物であるが、両妻から一間内側の棟通りに棟持柱を二本立て、その両脇四箇所に床束とは別に構造柱を建てるというやや複雑な構造である。同様の先行例として、紀伊の鳴滝遺跡[39]の倉庫群があるが、法円坂倉庫群は古墳時代で最大の規模であるばかりか、前例のない正方位で建設されている。このような建築様式は倭国の伝統にはなかったもので、外来系であることは明らかである。

建物群廃絶後の竪穴建物の年代がＴＫ二三型式であることから、倉庫群の年代は五世紀後半とされてきたが、柱穴や建物群の周辺から初期須恵器が出土しており、五世紀前半に建設された可能性が高く、[40]上町谷窯との年代差はわずかであろう。

ところで、上町谷窯以前の台地上北部では、裾部の低地以外に人々がまとまって住んでいた形跡はほとんどない。台地の東縁には有黒斑の円筒埴輪を巡らせた古墳時代前期末～中期前半の御勝山古墳[41]があるが、難波津と関わるものとは考えにくく、東方の大阪平野に関係する首長墓であろう。つまり、法円坂倉庫群は先行する在地の集団および在地首長が存在しない未開発の地に王権の拠点として設けられたわけであり、吉田晶の見通しを裏付けることとなった。そして、上町谷窯はその先駆けであったと推測しておきたい。

なお、法円坂倉庫群は、柱穴が抜取られていることから、意図的に撤去されたことがわかる。現状で確かな根拠はないが、難波堀江に隣接していないという立地上の不利を克服するため、北方へ移転したのではないかと推測する。

（２）難波津の成立

法円坂倉庫群は多くの物資を蓄え、またそれを畿内各地に再分配する物資集散の拠点であった。当然ながら水運との密接な関係が想定される。法円坂倉庫群の建設は、北方約八〇〇ｍの大川（元の淀川本流）が難波堀江として整備され、難波津が置かれたことと連動したものであろう。難波津の中心部は難波宮の北西方面、高麗橋付近とされる（日下説）が、成立期の難波津の中心はその東方約一㎞、法円坂倉庫群の北方で大川に開くと復原される「大手前谷」に想定する見解がある。[42]確かにそこが倉庫群にもっとも近い上陸地点であり、合理的である。一方で、遺構・遺物に基づきつつ、大手前谷から天満橋にいたる大川南岸は旧淀川本流の攻撃面にあたるので津の位置には不向きとする見解もある。[43]大勢はその通りであるが、五世紀に遡る遺構はそこにはなく、むしろ東の天満橋北岸で発見されている（先述）。難波津を特定の港湾施設に限定するのではなく、もう少し広い一定の地域を指す概念でとらえる筆者は、中心部の移動はありうることだと思う。

堀江と津とクラの一体的な開発事業は、瀬戸内水運のターミナルと

して、さらには朝鮮半島、中国南朝との交渉の窓口としてこの地に拠点を必要とした当時の倭王権によるものだろう[44]。王権の外港としての難波津の成立は、かつては六世紀以後とされてきたが、遅くとも五世紀前半に遡ることは明らかである。

上町谷窯の初期須恵器と法円坂倉庫群は、朝鮮半島から中国大陸につながる外来の窯業と建築であった。このことは、難波宮下層遺跡の起源が外来文化に彩られていたこと、つまり難波津は、最初から外来文化と結びつき、王権の外港としてスタートしたことを示す。前項でみたように、先行する集団がいない地であったがゆえのことであろう。

(3) 小　結

須恵器生産は朝鮮半島から倭王権によって導入された窯業であり、陶邑古窯趾群が最大の生産地となるが、陶邑窯と離れたこの地の初期須恵器と王権との関わりをどう見るかは難しい。しかし、王権が陶邑の工人を上町谷へ派遣したとし[45]、その工人らは、窯構造や出土遺物から陶邑大野池地区（ON二三一号窯）の工人らと深い関係にあったという指摘[46]があり、無関係と見ることは難しいであろう。また本窯と連続するように法円坂倉庫群がこの地に建設されたことは、両者の密接な関連を予想させる。

倉庫群の廃絶はTK二三型式かそれ以前であるとしかいえないが、その段階までの竪穴建物の発見例は少ないが、倉庫群の東方と南方約四〇〇mの上町台地上のみならず、北方約一二〇〇mの大川（難波堀江）を北に越えた低湿地（天満本願寺遺跡）など広い範囲におよんでいる。そのうち東方約五〇〇mの地点ではガラス玉の鋳型が出土するなど、手工業生産の痕跡を示す竪穴建物が発見されている（先述）。その時期は初期須恵器に続くTK二〇八型式であり、まだ法円坂倉庫群が存在していた可能性がある。クラと手工業生産の密接な関係は、令制下では、大蔵省所管の典鋳司が金・銀・銅・鉄を造り、塗飾・瑠璃・玉作のことを掌っていた[47]ことからも知られる。王宮のクラが手工業生産を伴うという姿がこの段階にはすでに成立していたことは重要である[48]。

ガラス工芸は、上町谷窯の須恵器生産を継承する手工業であった。現時点では資料不足であるが、法円坂倉庫群に伴う手工業生産はガラスのみに限定されるものではなかったと推測しておきたい。

三　難波宮下層遺跡の展開

(1) 史料からみた六～七世紀の難波

六世紀になると、『日本書紀』継体六年（五一二）一二月条に外交使の官舎「難波館」が初めて登場する。この時、百済使は任那四県の割譲を求めて来朝していた。安閑元年（五三四）一〇月には郡毎の鑊丁とともに「難波屯倉」を設置している。その翌年九月には難波の大隅嶋と媛嶋に牛を放つ記事がある。安閑は「名を後（世）に垂れん」ことを願って牛牧を設けたという。

『上宮聖徳法王帝説』や『元興寺縁起』によれば、戊午年（五三八）に仏教が伝来するが、庚寅年（五七〇）に仏像等が難波堀江に流された

という。一方、『日本書紀』は仏教伝来を欽明一三年（五五二）とし、同年、疫病が起ったため、物部尾輿らが仏像を難波堀江に流し棄てたとするが、敏達一四年（五八五）にも同様の記事を載せている。同一事件の重複記事かもしれないが、後者の記事では、仏像を焼き、堀江に棄てたのは物部守屋であり、あるいは二度もこのような事件があったのかもしれない。いずれであれ、難波の地が異国の神である仏教の導入をめぐる激しい争いの最前線であったことがわかる。

以下、『日本書紀』から引用する。欽明二二年（五六一）には、「難波大郡において諸蕃を次序す」とある。このとき新羅は百済の下位に列せられたため、新羅使が怒って館舎にも入らず帰国し、外交問題にまでなった。難波大郡と難波館（館舎）が外交施設であったことがよくわかる。欽明三一年（五七〇）には高句麗の使者が越に来着した際、難波から飾船を近江（琵琶湖）に派遣して出迎えている。王権にとって外交の地はあくまでも難波だったのであろう。敏達六年（五七七）一一月には百済が経論・律師・禅師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工らを献じ、「難波大別王寺」に安置したという。敏達一二年（五八三）には倭国が、倭人の父を持つ百済官人日羅を招聘したものの、百済に不利な外交策を上奏したため、難波館にて百済人の従者に日羅が暗殺される事件が起っている。崇峻元年（五八七）、仏教をめぐる争いはついに大王家・蘇我氏と物部氏の全面対決となるが、滅ぼされた物部氏の宅があった難波はまたもこの抗争の地となり、その際、厩戸皇子が四天王寺建立を発願したという。

推古朝以後をみると、その六年（五九八）四月、新羅へ派遣された難波吉士磐金が帰朝の際、鵲二隻を献じ、「難波杜」にて養わせている。これは延喜式（臨時祭・四時祭）で「難波大社」とも呼ばれた式内難波坐生国咲国魂神社（生国魂社）の杜であろう。同一六年（六〇八）四月、遣隋使小野妹子の帰国とともに来訪した隋使裴世清のために「新館を難波の高麗館の上に造る」とあり、六月、隋使が難波に到着すると「飾船三〇艘を以て客等を江口に迎え、新館に安置す。」とある。難波館（三韓館）には高麗（高句麗）館、百済客館堂などが設けられたが、この時初めての中国からの使者に対して新館が建設され、国を挙げて難波津で彼らを迎えたわけである。外交使が来訪すれば、飛鳥へ往来するにふさわしい立派な道路が必要となる。それが、推古二一年（六一三）一一月に「難波より京へ至る大道を置く。」とある大道の整備であろう。推古三一年（六二三）七月には新羅・任那の使者が仏具一式を貢進し、舎利、金塔、観頂幡などが四天王寺に納入される。唐武徳元年（六一八）には隋が滅亡し唐が建国するが、舒明四年（六三二）一〇月には初の遣唐使の帰国とともに、唐使高表仁が来訪、難波津の江口にて迎えられる。朝廷は船三二艘、鼓吹、旗幟で飾り、難波「館」に案内している。皇極元年（六四二）二月には難波郡にて高句麗の献上品を検校し、また高句麗使・百済使を饗応している。同年七月にも難波郡で百済の調と献物を検校している。この難波郡とは難波大郡とみるのが通説だが、鎌田説のような有力な異論がある。

以上は、主な文献史料を通してみた難波の六～七世紀であるが、記

事のほとんどが対外交渉に関わるものであり、難波の外交拠点としての位置を鮮明に示している。

(2) 発掘調査からみた六～七世紀の難波

ここでは調査の結果をいくつかの項目に区分して下層遺跡の展開を述べたい。

難波宮下層遺跡の建物群　難波宮下層遺跡の建物群の大半は細かい年代特定が難しいのが実情である。そのなかで、大阪歴史博物館が建つ敷地では、法円坂倉庫群に後続して七世紀中ごろまでの竪穴建物、掘立柱建物が少なくとも七二棟みつかり、うち四〇棟の年代推定が可能であった[49]。

四〇棟のうち五世紀代とみられるＴＫ二三～四七型式では竪穴建物が三棟あり、倉庫群廃絶後、この地点が居住地に変化したことがわかる。注目すべきは、ＴＫ二三型式に位置づけられる二棟は倉庫群と同じく正方位に近い棟方位をとることである。この北方に当時の難波津の中心部があったからであろう。

その後の建物は六九棟で、みな掘立柱建物である。年代推定が可能な三七棟のうち、六世紀初頭ごろから後半までの半世紀以上の期間におさまる建物は三二％の一二棟であり、この比率で年代不明の残りの建物を推計すると一〇棟で、合計二二棟となる。この間に土器の型式はＭＴ一五、ＴＫ一〇、さらにＴＫ四三型式へと三型式の変遷をしている。同時期に建っていたのもこの三分の一程度（七棟前後）かと思われる。次いで六世紀末～七世紀初めの建物が一〇棟ある。同じ方法で推計すると合計一九棟となるが、この時期はＴＫ二〇九型式に相当し[50]、その多くが同時存在した可能性がある。つまり、大きく増加したことになる。さらに、七世紀前半代に位置づけられる建物は一五棟で、同様の推計では合計二八棟となる。この期間は難波の土器編年では難波Ⅲ古～中段階と二時期にあたるので、この半分程度が同時存在であったとみられる。機械的に割れば一四棟となり、前代に比べると減ったかにみえるが、七世紀とみられる建物が集中する地点もあるので、おそらく実態としては、さしたる変化はなかったと思う。

以上の建物群の棟方位は、ＴＫ四七型式の竪穴建物以後、大きく変化し、北で西に振れている。北方の難波津中心部が西に移動したためであろう（後述）。

このように、難波宮下層遺跡は、法円坂倉庫群の廃絶後、六世紀を通じてその規模を拡大し、六世紀末～七世紀初頭つまり推古朝（五九三～六二八）のころにほぼピークに達し、人々の大規模な集住が続く。その規模は東西約一㎞、南北約一・五㎞におよんでいた。

手工業生産　手工業生産が行われた形跡はいくつもある。ガラス工芸は継続しており、鋳型が難波宮の南東と南西で発見されている。そして新たに以下のような生産活動がみられる。

六世紀に入ると、難波では他地域にはない独自の土器生産が始まる[51]。難波型と呼ばれる土師器炊飯具であり、甕や甑などの体部外面を全面ナデで仕上げるのが特徴である。上町台地北部を中心とする限ら

れた地域に供給された独自の土器は、一定の人口集中がなければ理解しにくい。一方、須恵器生産は、TK二三型式以後、約一〇〇年の空白を経て焼け歪みの著しいTK二〇九型式の須恵器が宮の南西の龍造寺谷で出土している。六世紀初頭ごろのMT一五型式で須恵器の出土が急増することと相まって、その生産が継続していた可能性が指摘されている。[52]

また六世紀後半以後、金属器の生産が確認される。難波宮北西の本町谷では数基の鍛冶炉やそれに関連する炭窯などが検出され、[53]宮の南東、上町谷の支谷や南西の龍造寺谷でも鉄滓やふいごの羽口の出土があり、鉄器生産は少なくとも三カ所で行われたことがわかる。加工痕のある鹿角なども認められ、[54]後述する牛馬に関わる部民の存在などから、角を含む動物骨の加工、皮革生産なども想定可能である。

外来土器　難波では古墳時代の韓式系土器は当然、五世紀を中心に出土するが、これは摂河泉で広くみられものである。これに対して六世紀以後には、伽耶土器や新羅土器、百済土器が出土するようになり、特に六世紀後半からの新羅土器・百済土器が他地域に比べて突出して多い[55]ことは、この地の大きな特徴である。出土土器には供献具（中小型の壺類）が多いが、食前具（杯・椀）や炊飯具（甕）、貯蔵具（大型壺）という生活道具もあり、渡来人の来住を具体的に示す。そうした人々の渡来は記録には残りにくいが、『日本書紀』がかすかに伝えるところでは、推古一六年（六〇八）、「是歳、新羅人多く化来す」とあり、その多くは難波に到着しただろうし、その後もこの地に定着した人々が少なからずいたであろう。

ただ、重見が指摘するように、新羅土器では蓋付の長頸壺が大半を占めていることは、その中味が贈答品に値するようなものであり、それが難波大郡や館などを舞台とする外交交渉などでもたらされたことも確かにありうるだろう。一方で重見の新羅土器編年では、難波遷都の七世紀中ごろ以後、この地での新羅土器の出土が途絶えるという。対外交渉の最前線である難波に遷都しながら、都であった時期に難波で新羅土器が出土しないというのは不可解で、寺井説と異なるところである。ちなみに、七世紀後半には飛鳥・藤原地域で、八世紀には平城京で新羅土器がまとまって出土している。

宗教環境　七世紀になると古代寺院の建設が始まる。四天王寺では金堂や塔の軒瓦が七世紀第一四半期に葺かれ、先述の仏具が納入されたのと歩調を合わせるかのように、伽藍の建設が進んでいたようである。七世紀前半の瓦は難波宮下層遺跡、その東方の森の宮遺跡、南方の細工谷遺跡、北西方面の大坂城下町跡下層などでも出土し、寺院建設が進展していたことを示す。

難波の古代寺院造営を整理した谷崎仁美は、難波プレ1期（四天王寺造営前）、難波1期（四天王寺創建期）を大化前代にあてている。プレ1期は飛鳥寺の創建瓦とその後続瓦との同范関係が想定される[56]瓦で、難波宮下層遺跡の法円坂廃寺と大坂城下町跡下層の二寺があり、1期には法隆寺若草伽藍の系譜をひく四天王寺の創建瓦（六二〇年ごろ）、それと同范の細工谷遺跡が加わる。遷都前の難波には少なくとも四カ寺

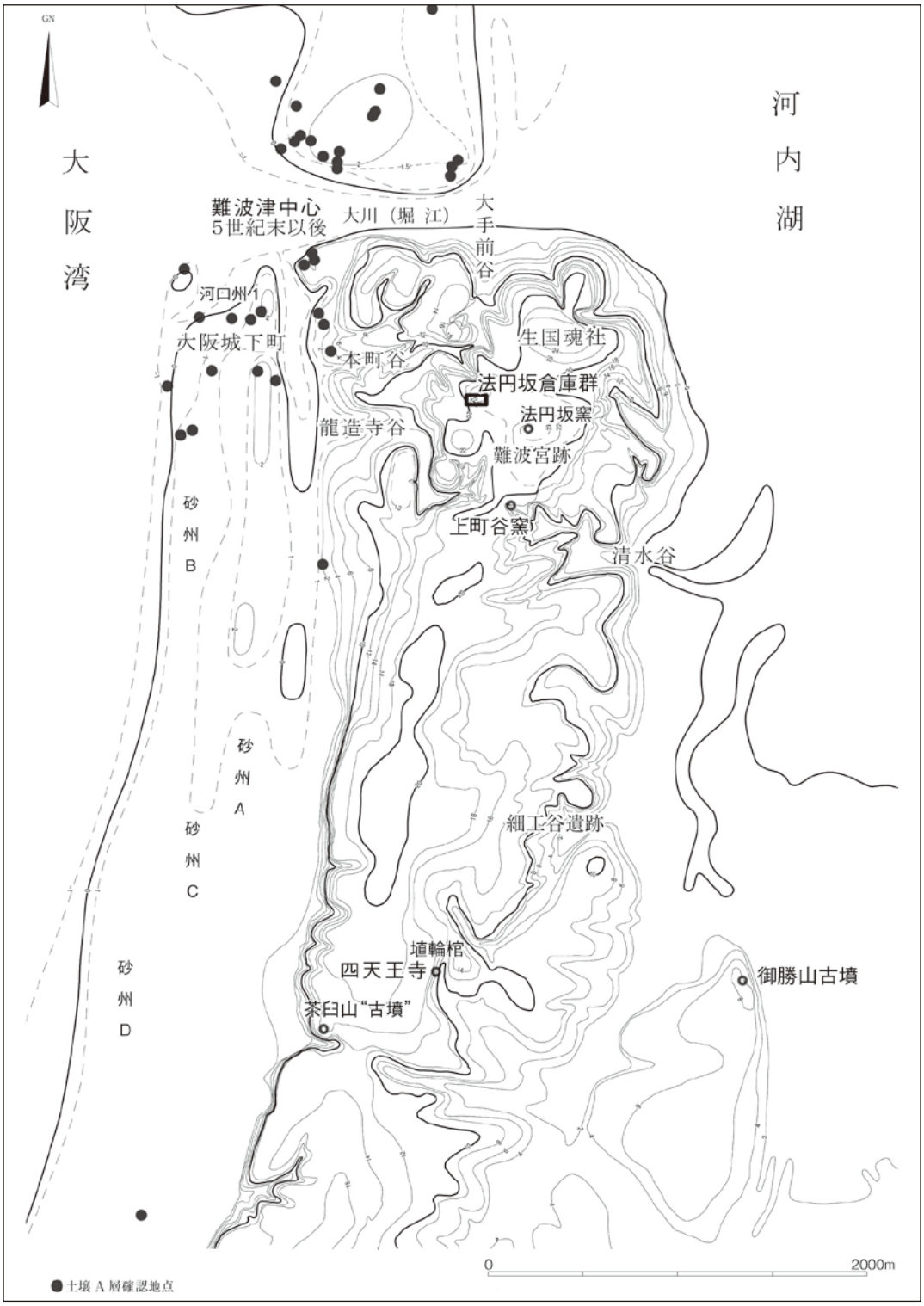

図　大化前代の上町台地

趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也 2014「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」（『大阪上町台地の総合的研究』大阪文化財研究所・大阪歴史博物館）巻頭図版 4 を改変

の存在が知られる。そのうち法円坂廃寺の瓦は飛鳥寺創建瓦との同范が予想される難波Ⅰ類であり、もっとも古い。1期の細工谷遺跡は瓦の出土量が少ないので、小規模な仏堂のみと思われ、百済系渡来人らが四天王寺から瓦の供給を受けて建設した最初の百済寺であろう。[57]

なお、寺院以前の難波の宗教環境として、生国魂社の存在があげられる。この神は宮廷祭祀である八十嶋祭との関係が深いが、元来は難波の住人らの守護神であり、上町台地の最北端に鎮座していた。周囲に可耕地がなく、また吉田説にみる難波の住人構成でも農耕民がいた形跡がないので、農耕神とは考えにくい特殊な神である。[58]

官衙・居館　黒田慶一は難波宮中心部の下層遺跡の官衙的建物群を難波大郡だとし、長柄豊碕宮造営時に東方へ移転し、それが前期難波宮の東方官衙を兼ねたとした。白雉二年一二月晦日、孝徳が大郡から豊碕宮へ遷ったから、両者が同時存在したことを矛盾なく説明しようとしたのだろうが、東方官衙の殿舎群が孝徳常居の宮室の一部とはまず考えられない。移転したならば、別の地であろう。私は、この官衙が難波屯倉の統括施設か、または鎌田説の難波郡の庁舎であれば、豊碕宮建設によって廃絶したものと理解できると思う。

それとは別に、難波宮の南方五〇〇m足らず、清水谷を南に臨む地点で、塀と溝に囲まれた建物群の一角が発見されている（OS九二―七次調査）[59]。七世紀初頭ごろと中ごろの整地層に挟まれて、直角に屈曲する幅一・八m前後の大溝と一本柱の塀に区画された敷地内に掘立柱建物がみつかった。その方位は正方位でなく斜向していた。大溝と建物を廃絶させた上層の整地層は七世紀中ごろ（難波Ⅲ中段階）なので、初期難波京（難波京Ⅰ期）の土地造成によるものとみられる。

この建物群は、清水谷が五世紀以来、一貫して須恵器等の生産地であったという想定[60]にしたがえば、屯倉の生産活動に関わる有力氏族の居館または官衙そのものであった可能性があるだろう。

牛　馬　朝鮮半島からの馬の大量渡来は古墳時代中期のことであるが、難波でウマの骨が出土するのは、現在のところ六世紀になってからである。しかし雄略紀二年一〇月条に雄略の御者「大津馬飼」がみえており、皇極三年三月条の蘇我氏の「大津宅倉」が難波大津にあったとされているから[61]、この御者は「難波大津馬飼」であろう。

一方、牛の大量渡来は6世紀前半であり、安閑紀の大隅嶋・媛嶋の牛牧は、王権が組織的に牛の導入を図ったことを物語る。前者は東淀川区大隅、後者は西淀川区姫島がその遺称地であり、いずれも上町台地の北方または北西の低湿地である。そこには、備前児島屯倉にいたと同様の「牛守部」がいたはずである。[62]

道　路　道路については、未発見ながら、法円坂倉庫群と難波津を結ぶ道路があったはずである。[63]それは単にクラと津との密接な関係というだけでなく、いずれも王権が設けた施設である以上、自然道路のたぐいではなく、新たに建設された道路であったと思われる。

次いで、先述した推古二一年（六一三）一一月の「難波より京へ至る大道」であるが、この道路を堺・松原市境で発見されている大和川今池遺跡の「難波大道」であるとして、その建設が六世紀後半に遡ると

の見解がある。[64] この想定にはきちんとした根拠が明示されていない。実際、難波宮下層遺跡ではそのような正方位道路は片鱗すらなく、また最後まで正方位の地割や建物群もないので、「道路はあったが、のちに削られて失われた」という想定もできない。[65]

しかし外交使の往来に伴う官道の整備はあっただろう。それは難波津から四天王寺へ南下し、屈曲して現国道二五号線に大略一致しつつ河内へ向かう斜向道路であったとみるのが自然である。このルートの四天王寺以南は『続日本紀』天平勝宝八年（七五六）四月一五日、孝謙天皇・聖武太上天皇らが平城帰京時に通過した渋河路に合致する。近年、渋河路は壬申の乱で近江軍が通過した大津道であるという有力な見解があり、[66] 私も大津道を長尾街道とする通説には根拠がなく、難波大津を起点とする幹線道路とみるのが妥当と考えている。このように、推古朝には難波津を起点とする道路整備も行われたわけである。

(3) 小　結

大阪歴史博物館の敷地で発見された建物群の特徴は二点ある。第一に、TK二三型式までの竪穴建物が正方位に近い棟方位をとっていたのに対し、TK四七型式（五世紀末）の竪穴建物以後は、北で西に大きく傾く方位に変わり、しかもそれは一世紀半ほど変わっていないことである。地形環境が変わっていない以上、この変化には人為的な要因を考えねばならない。前者の竪穴建物が正方位をとっていたのは、おそらくその北方の大手前谷に難波津があり、そちらを正面としていたからであろう。これに対し、建物群が北西を向くように変わるのは、難波津の中心部がその方面の高麗橋付近（通説の難波津）に移動したからではないかと思われるのである。新たな中心部に近い天神橋遺跡で初現の遺構は六世紀初頭ごろのMT一五型式の土器埋納坑であり、それまでにこの移動があったことをうかがわせる。こうして建物群の方位が長期間固定されるようになると、それに応じた何らかの地割（街並み）のたぐいが形成されるにいたった可能性もありうると思う。

第二に、掘立柱建物六九棟のうち建物構造が不明の九棟を除くと、四割の二五棟とクラの比率が高いことがあげられる。特別に大型の建物はみられないが、これは明らかに通常の集落と異なる建物群なのである。そこで、難波宮下層遺跡を難波屯倉であろうとする南説が生まれたことは先述した。

その後、南は「七世紀前半の上町台地北端は、初期の都市といえる成長を遂げており、その状態を包括的に表す単語としては難波屯倉がもっとも合っている」との見解にいたっている。[67] ここにはいくつかの論点がある。そのひとつは、屯倉を都市とする見方の是非である。これは、農地とクラとそれらを管理する建物からなる王権の生産拠点という通説的なミヤケの定義と相容れないものであり、王権の政治的軍事的拠点とする舘野説[68]とも異なる。都市化した難波の中心にミヤケが位置づけられるとすべきであろう。その二は、六世紀から七世前半の難波が、倉庫群が置かれた五世紀の様相と都城（難波宮・京）との中間的な位置にあるという見方である。しかし、法円坂倉庫群と難波屯倉

はいずれも王権に直属したものである。確かに施設（建物群）の様相には、五世紀と六世紀の間に変化があるが、王権の支配が緩んだわけではないだろう。各種の手工業生産が五世紀以来継続しているという南説・田中説があり、王宮のクラが手工業生産を伴うという令制下のあり方が五世紀には生まれ、その後も継続しているからである。その三は、「周辺地域を含めた経済体として上町台地北端の都市化をみる視点と方法」である。王権の直轄地でありながら、その政治力が介在せずに経済だけで難波が都市化したと考えるのは、いささか無理がある。大化前代の難波は紛れもなく政治的拠点であり、そのことが経済的発展をもたらしたのである。

近年、難波宮下層遺跡で手工業生産の様相がずいぶん判明してきた。田中清美は難波宮の東方と南方が五～六世紀の手工業生産域、難波宮の一帯から北方に人々の居住・消費域と区分し、難波堀江（現大川）に向かって北に開く大手前谷に難波津を想定するとともに上町谷窯以来の手工業生産が王権によるものであるとしている。[69] またその手工業生産が渡来人と密接な関わりがあったとした。[70] 南秀雄はこうした手工業生産を、難波屯倉を構成する重要な要素と評価する。

私はこの中でも重要なのは鉄器生産だと思う。その製品が何であったかは判然としないが、農耕具が含まれていたとの想定は不可能ではない。しかもその主たる担い手が朝鮮半島からの渡来人であったとなれば、先進的な製錬・鍛冶技術を携えてきたであろう。ここで思い起こされるのは、難波屯倉の「毎郡鑊丁」とは、先進的な鉄製農具を有し、河内の諸地域から徴発された集団とした直木孝次郎説である。ここから推測されるのは、鑊丁が用いた優秀な農具とは、難波屯倉で渡来人が生産した鉄製品ではないかということ、また難波屯倉を支えていたのは河内の労働力であったことの二点である。後者については、上町台地には水田可耕地がないので、広く周辺に想定するとすれば、河内湖沿岸の平野部しかなく、それは必然的に河内にあったことになる。それゆえ、河内から労働力が徴発されたのであろう。難波屯倉の主たる農業生産の地は河内であり、しかも「郡ごと」なので、かなり広範囲だったと推測される。

鉄製農具は極めて重要な生産手段であったが、六世紀に大量渡来した牛も同様で、その強い耕作力は現代の農耕機に匹敵するほどに感じられたであろう。大隅嶋と媛嶋における牛牧の創設は、安閑が後世に名を残したいと願ったほどの大事業であったから、難波屯倉だけでなく、少なくとも畿内各地のミヤケには供されたと思われる。令制下の官田で二町ごとに牛一頭が配されていた（養老田令置官田条）のは、その遺制ではないかと思われる。官田は畿内だけに計一〇〇町置かれ、大宝令では屯田（みた）と称し、屯倉との関連が注目されているからである。

七世紀に入って寺院建設が進んだことは、六世紀後半の難波を舞台とする仏教導入をめぐる抗争と物部氏滅亡の必然的な結果であった。四天王寺が物部氏の所領を基盤とした点からも、そのことが知られる。新来の異国の神は、六世紀後半には難波大分王寺に安置され、仏教は大

和盆地とともに難波に定着し、各地に広がったのであろう。難波は遣隋使や遣唐使として渡海する留学僧が多数来集する地でもあった。さらに、仏教以前の難波の旧来の神は、非農耕神的な生国魂社であった。

外交使が往来する幹線道路は都城に次ぐ国家の顔である。それは秦始皇帝以来の馳道に倣う直線道路である。しかし前期難波宮以前に正方位の道路を造る歴史的条件はまだなかった。それゆえ、推古二一年（六一三）の道路整備では、難波大津を起点として所どころで屈曲する斜向道路で大和への最短距離を志向したのである。その事情は『隋書』巻八一東夷伝倭国条から窺える。大業四年（六〇八）、倭国に遣わされた隋使文林郎裴世清に対し、倭王は「我は夷人にして海隅に僻在し礼義を聞かず。是を以て境内に稽留し，即ち相見えず。今、故に道を清め館を飾り、以て大使を待つ。冀わくば大国惟新の化を聞かんことを。」と述べており、倭国ではことさらに道路と王宮の整備を進めていた。推古二一年は第五次遣隋使（犬上御田鍬ら）が派遣される前年で、帰国時に再び隋使の来朝を期待しての道路整備だったのであろう。その起点となる難波には、外交施設としての大郡と難波館（三韓館や唐新館）が置かれていた。幹線道路の国際的性格がよく窺われる。

難波が外交拠点であったことは、さまざまな史料から知られるところであるが、それを象徴的に示すのは、欽明三一年（五七〇）、高句麗の使者を近江で出迎えるためにわざわざ難波から飾船を派遣したことである。当然、高句麗使は相楽館を経て難波に到着したのち、大和へ向かったのであろう。当時の外交権は難波にあったのである。

難波に来た外国人は使節だけではなかった。吉田晶が明らかにしたように、令制下の難波西成・東生両郡の住人構成は、突出して渡来人の比率が高いものであった。そのことは外来土器からも、百済人や新羅人が大化前代から難波に来住していたことを証明している。食前具や炊飯具、貯蔵具の存在がそのことを物語る。

百済土器には炊飯具はないものの、食膳具や貯蔵具、供献具などがそれぞれ一定の比率を占めている。これに対し、新羅土器は圧倒的に定型的な長頸壺が多く、器種構成が明らかに偏っている。そのため、非公式な外交交渉の献物や戦利品などとみる重見説が生まれた。氏によれば、任那調をめぐって日羅関係が悪化した六世紀後半以後、特に推古朝で対新羅外交が盛んになるという。この説は、外交の一面を示してはいるが、関係が悪化すれば外交の停滞や途絶は普通のことである。にもかかわらず、その時期にも上に見たような新羅人の渡来があった。彼らが倭国到着に備え、身の安全のために贈答品を持参することも、当然あっただろう。これは外交ではない。

以上のように、大化前代の難波は五世紀の須恵器生産と巨大倉庫群以来、難波津と連動した流通と手工業の拠点であり、かつ広く河内を基盤とする農業生産を掌るミヤケが置かれ、また牛牧が設けられて少なくとも畿内各地のミヤケの耕作に牛が導入された。内政機関である小郡、外交機関の大郡が置かれ、七世紀には異国の宗教を象徴する寺院が数カ所で建設され、多数の渡来人が住み、難波津を起点とする幹線道路も整備されていた。

杉本厚典は都出比呂志の都市論[71]に拠りつつ、法円坂倉庫群が、河内湖や各水系の生産拠点を舟運や馬を用いた交通ネットワークと、その生産物の蓄積・管理のセンター機能を果たしたとした[72]。もう少し国際的視点がほしいところである（後述）。その後身たる難波屯倉は手工業と農業及びその流通センターであり、牛牧も畿内の畜力導入のセンターとみることができる。難波津は大津道につながる水陸の交通センターでもあった。大郡はいうまでもなく外交センターである。生国魂社や四天王寺は宗教センターであった。これらはいずれも異なった契機のもとに、つまり別々に置かれたものである。それらが一体となって大化前代の難波があった。佐々木憲一は各種のセンター機能が別々に置かれ、それらが有機的に結びついて都市が成立するとして、難波宮下層遺跡を都市的集落である可能性が高いと評価した[73]。

私は、大化前代の難波は、七世紀前半までに列島社会で屈指の古代都市となったのみならず、外交センターを擁し、多数の渡来人が住む、倭国随一の国際都市であったと考える。

四　大化前代の難波

上町谷窯と法円坂倉庫群は、初期須恵器段階の五世紀前半にあいついで設けられた。これらとの併行関係が予想される大王墓としては、初現期の無黒斑の埴輪を有し、古市古墳群で最大の誉田山古墳（前方後円墳集成6期、TK七三型式併行）、百舌鳥古墳群で最大の大山古墳（前方後円墳集成7期、TK二一六型式～TK二〇八型式併行）があげられる[74]。法円坂倉庫群は、前方後円墳の巨大化が最高潮に達するのと歩みを同じくするかのような大型志向のクラであったことがわかる。

ではなぜ、この時期にこうした倉庫群が設けられたのであろうか。

時あたかも倭の五王の最初の倭王讃が中国南朝の宋へ遣使した永初二年（四二一）・元嘉二年（四二五）を前後する時期にあたる[75]。それはおそらく、「広開土王碑文」に辛卯年（三九一）から永楽一四年（四〇四）または永楽一七年まで、百済と通じた「倭賊」「倭寇」がしばしば新羅に侵攻し、高句麗がこれを潰敗させたと記すような東アジアの大規模な戦争と倭軍の敗退をうけ、朝鮮半島における地位を獲得することが目的だったのであろう。このような対外交渉の重要な局面で倭王讃が建設したのが、法円坂倉庫群であった。それはクラでありながら、対外交渉と深くかかわる王権の政治的軍事的拠点だったのである。

難波ではまだ倉庫群と同時期の大規模な建物群などはみつかっていないが、よく言われるようにクラだけが単独で存在したとは考えにくい。その管理施設を含む何らかの王権の機関が難波に置かれたとみるのが自然であろう。それはおそらく、初期の難波津中心、つまり北方の大手前谷あたりかと推測しておきたい。

法円坂倉庫群の廃絶には二つの理由があったと思う。ひとつはその規模である。六世紀以後のこの地の倉庫は大きいものでも桁行・梁行とも三間であり、面積は二〇㎡内外である。那津ミヤケとの関連が想定されている福岡市比恵・那珂遺跡の倉庫群（六世紀後半）や有田遺跡の倉庫群もほぼ同様である。実用面ではこの程度の倉庫を多数運用す

るのが便利だったと思われ、一棟が八二～九八㎡もある法円坂倉庫群は、いかにも大きすぎ、あまり実用的だったとは思われないのである。もうひとつは立地である。北の大川まで約八〇〇mもあり、大手前谷が入江になっていたとしても、五〇〇m以上はあっただろう。しかも比高差は、二〇m程度はあったとみられる。この二点の不便さを解消するために、倉庫群は大手前谷方面へ移転したのではないかと思う。

さて、六世紀以後の難波屯倉に対して、五世紀の法円坂倉庫群をいかなる概念で理解すればいいのだろうか。舘野和己説では、典型的なA型ミヤケ（農地を伴わない王権の政治的軍事的拠点）となるが、氏はいわゆる「前期的ミヤケ」を否定するので、これをしてA型の「先駆」と称するしかなかった。

倭王讃が設けたクラとその管理施設を含む難波の直轄機関として第一に想定されるのは、朝鮮半島に関与するための外交機関であろう。それに当たるのは難波大郡である。その初見は欽明紀二二年（五六一）であるが、難波館の初見は継体紀六年（五一二）である。館は外交官舎であり、公的機関（庁舎）の存在を前提とすると考えれば、大郡は六世紀初頭まで遡りうる。しかしなお、法円坂倉庫群とは一世紀近い隔たりがあり、「プレ大郡」とみるべきであろう。第二の可能性は、難波高津宮との見方である。それが津を望む高台の宮室であるとすれば、大手前谷の周囲にあったともみられる。

それはともかく、クラを中心とする王権の直轄機関が東アジア外交と連動して建設されたことは、その存立が外交の行方次第となることにつながったであろう。この機関はおそらく、倭の五王の南朝への遣使が四七八年を最後にして途絶えるとともに、いったん断絶することになったのではないだろうか。五世紀の末ごろ（TK四七型式）、難波宮下層遺跡の建物が北西方面を正面とする棟方位に変わる。難波津の中心が移動したのである。これを以て、法円坂倉庫群の後身建物群も廃絶したのではないかと憶測する。

その後の展開は、前章の小結で述べたとおりであり、新たに置かれた難波屯倉（難波宮下層遺跡）を中心としていくつかのセンター機能が結びつきながら、難波は国際都市へと発展した。

最後に、大化前代難波の総括的概念に迫ってみたい。

これまでは、日本の古代都市の成立を都城に求める傾向が強い。確かに王宮を中心として碁盤目状の計画道路が張り巡らされた空間は紛れもなく都市の姿である。しかし日本の都城はあくまでも律令制の導入とともに成立したものである。つまり都城とは律令制に固有の都であり、都市なのである。

それでは、古墳時代に固有の都市はあったのだろうか。この点については三世紀の纒向遺跡が大きな注目を集めているが、問題はその後につながらないことであろう。古墳時代の王宮は奈良盆地でも東南部をはじめ山沿いの地に位置することが多く、[76] そうした立地では、王宮の周囲に大規模な集住を達成することが難しい。まして、王権の職務を有力氏族らが在地で分掌しているようでは、王宮の周囲への集住など発想できなかったであろう。また、前方後円墳をはじめとする無数

の古墳造営を恒常的に行っている社会では、都市建設に大規模な労働力を割くことができたかどうか、かなり疑問である。古墳造営に伴う集住はあったとしても、それがいまだにみつかっていないのは、あくまでも「飯場」（労働力だけの一時的集中）だったからであろう。

しかし、大きな地形改変を伴わないような立地であれば、一定の集住は可能である。もちろんそれだけではなく、交通や流通の要となりうるような地理的条件が必要である。かつて鬼頭清明が水陸の交差する津に都市的な場を見出そうとしたのは、[77]そうした視点からであった。それにしたがえば、難波の都市化の第一段階は五世紀末ごろから六世紀前半に始まる。TK四七型式で難波津中心部の西方への移動があり、MT一五型式になると下層遺跡で須恵器の出土量が急増し、難波型土師器が登場する。そして難波屯倉が置かれた。大郡と難波館も、遅くともこの段階には置かれている。のちに継続する基本的な難波の姿が整うのがこの段階である。これに加えて、飛鳥時代になると古墳造営という非生産的かつ膨大な労働力を要する事業が大幅に縮小し、土地開発などの生産的な事業に振り分けることが可能となった。[78]難波宮下層遺跡における集住がピークに達したのはTK二〇九型式のころであり、まさに前方後円墳の終焉、古墳時代の幕引きである六世紀末～七世紀初頭のことであった。これ以後が第二段階である。

ところで、第一・第二段階を通じて古代都市難波の中核を占めたのは難波屯倉であった。その周囲には外交センターや、宗教センター、交通センターなどがあった。このような複合体を、どう理解すればよいのだろうか。

その点で大いに参考になるのが、先引の鎌田元一説である。氏は、大宝令以後の地方行政組織としての郡制とは別に、大化前代にみえる「郡（コホリ）」に着目し、「我が国における「コホリ」の源流が諸国に定着せしめられた朝鮮系渡来人集団の族制的人的団体としての呼称にあった」とし、「屯倉は御宅であり、あくまで支配の拠点としての館舎・倉庫等に立脚した名称であるのに対し、「コホリ」の呼称は元来その支配の下に編成された人的側面から発し、やがて館舎としてのミヤケそのもの、またその領域支配一般を指して用いられるに至った」と、領域支配の制としてコホリをとらえ、難波に設けられたいくつかの施設の有機的な複合体として「難波郡」の実態を想定した。これを承けて吉田晶は、「ミヤケ・アガタ・クニとは明確に区別された国家的直轄地を意味する用語として「郡」を中国古来の統治制度（郡県制）を受け入れて採用し、これを朝鮮の「評」の知識によってコホリと呼んだ」（カッコ内は積山）とした。卓見である。

しかしながら、鎌田説も吉田説も、まず「郡」があり、のちに大郡・小郡と『日本書紀』が追記した（鎌田）とか、分化した（吉田）とする。それはこれまでの考察からして、したがうことができない。難波郡が最初から大郡・小郡で成り立っていたとするか、逆に大郡や小郡があとからひとまとめにされて難波郡が成立したかのいずれかであろう。

本稿では、おもに難波遷都の背景を、難波の地に即して考えてみた。しかし、それが東アジア国際情勢と結びついてどのような歴史を

たどったのかという点については、五世紀はともかく、六世紀以後についてはまったく触れることができなかった。その点の考察は他日を期すこととしたい。

【註】

(1) 積山洋二〇一五（予定）「対外関係と難波大坂―織豊期・幕末維新期の遷都関連史料―」『日本古代の都城・都市（仮）』勉誠出版。
(2) 南秀雄二〇一四「難波宮下層遺跡をめぐる諸問題」中尾芳治・栄原永遠男編『難波宮と都城制』吉川弘文館。
(3) 難波宮跡訴訟記録保存会編一九八〇『難波宮跡の保存と裁判』第一法規出版。
(4) 山根徳太郎一九六九『難波王朝』学生社（初出一九五六）。
(5) 岡田精司一九七〇『古代王権の祭祀と神話』塙書房。
(6) 直木孝次郎一九九四「難波の屯倉」『難波宮と難波津の研究』吉川弘文館（初出一九七六）。
(7) 直木孝次郎一九七七「難波小郡宮と長柄豊碕宮」『難波宮と日本古代国家』塙書房。
(8) 鎌田元一二〇〇一「評制施行の歴史的前提」『律令公民制の研究』塙書房（初出一九八〇）。
(9) 吉田晶一九八二『古代の難波』教育社歴史新書。
(10) 千田稔一九七〇「古代港津の歴史地理学的考察―瀬戸内における港津址比定を中心として―」『史林』第五三巻第一号、史学研究会。
(11) 日下雅義一九八五「摂河泉における古代の港と背後の交通路について」『古代学研究』第一〇七号、古代学研究会。
(12) 木原克司一九八四「上町台地北部の微地形と難波宮下層遺跡掘立柱建物」『難波宮址の研究』第八、大阪市文化財協会。
(13) 中尾芳治一九八六『難波京』ニューサイエンス社考古学ライブラリー。
(14) 黒田慶一一九八八「熊凝考―難波郡と難波宮下層遺跡―」『歴史学と考古学　高井悌三郎先生喜寿記念論集』真陽社。
(15) 積山洋一九九〇「古墳時代中期の大型倉庫群―難波のクラと紀伊のクラをめぐる一試論―」『大阪の歴史』三〇号、大阪市史編纂所。南秀雄一九九二「五世紀の建物群の検討」『難波宮址の研究』第九、大阪市文化財協会。
(16) 南秀雄一九九二「難波宮下層遺跡の土器と集落」『難波宮址の研究』第九、大阪市文化財協会。
(17) 京嶋覚一九八九「難波地域出土の土師器とその地域色」『韓式系土器研究』Ⅱ、韓式系土器研究会。同一九九四「『難波宮下層』土器の再検討」『大阪市文化財論集』大阪市文化財協会。
(18) 都出比呂志二〇〇五「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱」『前方後円墳と社会』塙書房（初出一九九一）。同「古墳時代首長の政治拠点」『前方後円墳と社会』（初出一九九三）。
(19) 直木孝次郎・小笠原好彦編一九九一『クラと古代王権』ミネルヴァ書房。
(20) 舘野和己一九九二「畿内のミヤケ・ミタ」『新版古代の日本』第五巻、角川書店。
(21) 積山洋一九九四「上町台地の北と南―難波地域における古墳時代の集落変遷―」『大阪市文化財論集』大阪市文化財協会。
(22) 京嶋覚一九九四「「難波宮下層」土器の再検討」『大阪市文化財論集』（前掲注21）所収。
(23) 栄原永遠男二〇〇四「鳴滝倉庫群と倭王権」『紀伊古代史研究』思文閣出版（初出一九九四）。
(24) 大阪府文化財調査研究センター二〇〇二『大坂城跡発掘調査報告』Ⅰ。
(25) 佐藤隆二〇〇〇「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第一一、大阪市文化財協会。
(26) 京嶋覚二〇〇〇「鋳型と玉造」『葦火』八五号、大阪市文化財協会。
(27) 大阪市文化財協会『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』―一九九九～二〇〇〇年度―。

(28) 小田木富慈美二〇〇四「古墳時代の天満　～砂州上のムラ～」『葦火』一一三号、大阪市文化財協会。
(29) 小笠原好彦二〇〇六「難波館と相楽館」『喜谷美宜先生古稀記念論集』喜谷美宜先生古稀記念論集刊行会。
(30) 大阪市文化財協会二〇一〇『難波宮址の研究』第一六
(31) 寺井誠二〇一〇「難波に運ばれた加耶・新羅・百済土器―六～七世紀を中心に―」『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』（科研報告書）、大阪市文化財協会。
(32) 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所二〇一〇『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』。市川創二〇一二「上町谷一・二号窯について」『韓式系土器研究』Ⅻ、韓式系土器研究会。
(33) 重見泰二〇一二「畿内周辺の新羅の土器」「難波津・難波大郡・難波館と新羅の土器」『新羅土器からみた日本古代の国家形成』学生社。
(34) 南秀雄二〇一三「倉・屯倉」『古墳時代の考古学』六、同成社。
(35) 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所二〇一〇『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』。
(36) 田中清美二〇一四「難波宮成立前夜の上町台地北部の手工業生産と流通」『大阪上町台地の総合的研究』大阪文化財研究所・大阪歴史博物館。
(37) 大阪市文化財協会『難波宮址の研究』第一〇。
(38) 大阪市文化財協会一九九二『難波宮址の研究』第九。
(39) 和歌山県教育委員会一九八四『鳴滝遺跡発掘調査報告書』。なお、北摂の蛍池東遺跡でも同様の構造の倉庫群が発見されており、TK二〇八型式以前という年代から法円坂倉庫群より古いとみられてきたが、法円坂の年代の見直しにより、両者は大体同時期と再評価されることになる。大阪文化財センター一九九四『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡』。
(40) 積山　洋一九九〇「古墳時代中期の大型倉庫群」（前掲注15）。南秀雄二〇一三「倉・屯倉」（前掲注34）。
(41) 積山洋一九九二「長原古墳群と難波地域の円筒埴輪」『古代文化』第四四巻第九号、古代学協会。
(42) 田中清美二〇一四「古代難波地域の渡来人」『難波宮と都城制』吉川弘文館。
(43) 松尾信裕二〇一四「古代難波の地形環境と難波津」『難波宮と都城制』（前掲注42）所収。
(44) 直木孝次郎・小笠原好彦編一九九一『クラと古代王権』ミネルヴァ書房。
(45) 田中清美二〇一四「難波宮成立前夜の上町台地北部の手工業生産と流通」（前掲注36）。
(46) 田中清美二〇一四「古代難波地域の渡来人」（前掲42）。
(47) 養老職員令典鋳司条。
(48) 令制との一致という点では、養老倉庫令の倉於高燥処置条に「凡そ倉はみな高燥の処にこれを置き、側に池渠を開け。倉を去ること五十丈の内に館舎を置くこと得ざれ。」とあるのも、法円坂倉庫群と一致する。周囲に同時期の建物がなく、西側には北西に開く谷頭が湧水地であった。
(49) 南秀雄一九九二「難波宮下層遺跡の土器と集落」（前掲注16）。
(50) 掘立柱建物の存続期間が土器の一型式と同じとは限らないから、このような推計は、あくまでも便宜的なものにすぎない。建物群の消長をさぐるひとつの目安という程度で理解している。
(51) 京嶋覚一九八九「難波地域の土師器とその地域色」（前掲注17）。
(52) 田中清美二〇一四「難波宮成立前夜の上町台地北部の手工業生産と流通」（前掲注36）。
(53) 大阪府文化財調査研究センター二〇〇二『大坂城跡発掘調査報告』Ⅰ
(54) 大阪市文化財協会二〇一二『難波宮址の研究』第一八。
(55) 寺井誠二〇一三「難波における百済・新羅土器の搬入とその史的背景」『共同研究成果報告書』七、大阪歴史博物館。
(56) 谷崎仁美二〇一四「難波における古代寺院造営」『都城制研究』（八）、奈良女子大学古代学学術研究センター。
(57) 積山洋二〇一〇「難波京と百済王氏」『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』（前掲注31）。

(58) 積山洋二〇一三「飛鳥時代難波の宗教環境」『都城制研究』（七）、奈良女子大学古代学学術研究センター。
(59) 大阪市文化財協会一九九九『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』―一九九六年度―。
(60) 田中清美二〇一四「難波宮成立前夜の上町台地北部の手工業生産と流通」（前掲注36）。
(61) 吉田晶一九八二『古代の難波』（前掲注9）。
(62) 難波の牛馬については、積山洋二〇〇七「牛馬観の変遷と日本古代都城」『古代文化』第五七巻第一号。
(63) 京嶋覚二〇一四「難波における古代交通の研究課題―五～七世紀の道路を中心に―」『大阪上町台地の総合的研究』（前掲注36）所収。
(64) 森村健一一九九四「堺市発掘の難波大道と竹ノ内街道」『季刊考古学』第四六号、雄山閣。近江俊秀二〇〇六「七道駅路成立以前の道路遺構」『古代国家と道路』青木書店。
(65) 積山洋二〇一五（予定）「難波大道と摂津・河内の幹線道路網」『郵政考古紀要』第六二号、郵政考古学会。
(66) 中西康裕一九九一「大津道に関する一考察」『続日本紀研究』二七三号、続日本紀研究会。安村俊史二〇一二「推古二一年設置の大道」『古代学研究』一九六号、古代学研究会。
(67) 南秀雄二〇一四「難波屯倉と上町台地北端の都市形成」『大阪上町台地の総合的研究』（前掲注36）所収。
(68) 舘野和己一九七八「屯倉制の成立―その本質と時期―」『日本史研究』一九〇号、日本史研究会。
(69) 田中清美二〇一四「難波宮成立前夜の上町台地北部の手工業生産と流通」（前掲注36）。
(70) 田中清美二〇一四「古代難波地域の渡来人」（前掲注42）。
(71) 都出比呂志二〇〇五『前方後円墳と社会』塙書房。
(72) 杉本厚典二〇一四「原始・古代の大阪湾岸における集落と都市」『大阪上町台地の総合的研究』（前掲注36）所収。
(73) 佐々木憲一二〇一四「理論考古学と比較都市史からみた初期の都市大阪」『大阪上町台地の総合的研究』（前掲注36）所収。
(74) 広瀬和雄一九九二「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社。この編年は少し古く、陶邑窯でＴＧ二三一・二三二号窯やＯＮ二三一号窯が発見された今日では、手直しが必要かもしれないが、６期と併行する須恵器がＴＫ七三型式を含むことは、たぶん動かないであろう。
(75) 『宋書』巻九七夷蛮。なお、『梁書』巻五十四諸夷には「晋の安帝の時、倭王讃有り」とあるが、『晋書』巻九安帝紀には義熙九年（四一三）に高句麗、倭国らが方物を献じた記事に倭王の名はない。その後、元嘉七年（四三〇）の遣使は倭王名が記されておらず、その次の倭王の遣使は珍で、元嘉一五年（四三八）である（『宋書』巻五文帝紀）。
(76) 古市晃二〇一一「五・六世紀における王宮の存在形態」『日本史研究』五八七号、日本史研究会。
(77) 鬼頭清明一九九五「古代における津の都市的様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』六三集。
(78) 岸本直文二〇一五「七世紀後半の条里施工と郷域」『条里制・古代都市研究』第三〇号、条里制・古代都市研究会。

【付記】本稿は二〇一四年五月一七日、大阪市立大学日本史学会での発表をもとにし、その後の考察を加えて成稿したものである。

（大阪文化財研究所）